
人外-ジンガイ-

十色@停滞気味

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人外 - ジンガイ -

【Nコード】

N7171P

【作者名】

十色@停滞気味

【あらすじ】

ジンガイ
人外。

それは人から外れた者達のこと。

彼らは元々普通の人間だった。

ある日突然異質な能力を得、「人を殺める能力」を得る。

それは鏡獣フェンリルと呼ばれる怪物と”適合”した証だった。

その能力で彼らは裏の世界で生きるために「人間の人口を調整」す

る。

故に、彼らは『調整者』と呼ばれる。

調整者は世界の裏の住人として、表の人間達に紛れ今日も世界と人間のために平凡に”人殺し”をする。

序章（前書き）

この物語は 殺人の描写、残酷な描写、血の描写を含みますので苦
手な方はブラウザバックをよろしくお願いいたします。

序章

《人外》（ジンガイ）。

それは、人として外れてしまった者達のこと。

《人外》は人の身体と心を持ちながら人としてあり得ない異質の能力を持ち、化物にも人間にもなることができず、人間から忌避され迫害された者達。

ある日突然、異質の能力を得る。

その原因は鏡獣^{フェンリル}と呼ばれる存在にとり憑かれることによるものだった。

鏡獣とは個人の心から生まれる、獣の姿をした怪物。

鏡獣と宿主の人間と”適合”し、異質の能力を得た者は《人外》と呼ばれる存在となる。

能力を得た人間は化物じみた力を得、異質な能力を持ち人を殺めた。

そう、《人外》の能力。それは、《人を殺める力》だった。

彼らは表の世界で人間として生きていけない代わりに、「人間の人口を調節する者」として裏の世界で生きていくことを義務付けられる。

その人外達に与えられた名は『調整者』。

彼らは表の世界の住人に存在を知られることなく・・・裏の世界の住人として、《平凡》な生活をしている。

『人間の人口調整』という、《人殺し》をしながら・・・
『調整者』は鏡獣を身体に宿し、今も表の世界に混じり人口を調整している。

誰にも知られることもない、世界の裏の住人達の物語である。

第一話「白狐と災難」(前書き)

登場人物

> i 1 5 9 4 7 — 2 2 1 4 <
君色^{キミイロ} 雨蘭^{ウラン} 調整者。
偽名^{ササナミ}：笹波^{ササナミ} 俊樹^{トシキ}
通り名：『君色の梅雨』
鏡獣：白狐(能力：多面)

第一話「白狐と災難」

別に今までの俺は、非日常なんて望んじやいなかった。

今の日常は、普通で、平凡で、平常で変わらないと。

今の自分は、現在も、昔も、明日もずっと変わらないと。

そう思っていた。

そう思うしかなかった。

そんな現実で　そんな世界だから。

現実が変わらず、自分は変わらず、日常は変わらず、平常は変わらず。
ず。

普通に自然で今のまま・・・何も知らないまま生きていくんだと。

そして世界に何の意味もなく、干渉を受けずに死んでいくんだと。

だけど、俺がまだ十五才だったあの日。

俺のそんな思想はことごとく打ち崩される。

完膚なきまでに、ぶち壊された。

あの日までの人間だった自分は、木っ端微塵に破壊されたのである。

あの日。

あの禍々しい一匹の《白狐》に出逢うまでは。

第一話「白狐と災難」

午前四時四十五分。

公園にある背の高い時計は、その時間を示していた。

ここは日本のとある大都市。

周りには大小様々なビルが立ち並び、びっしりと敷き詰められている。

毎日この街では何百万という人々が通るのだから、朝早くのせいか歩いている人はあまりにも少なかった。

出勤に急ぐ会社員、ジョギングをしている老人・・・そんな歩行者の中

一人、異様に変わった学生が歩いていた。

季節が夏だというのにも関わらず、長袖の黒い学生服。

男の子にしてはあまりに長すぎる腰辺りまで伸びる長い髪。

初めてみた人は女性と勘違いしてもおかしくないほどである。

長髪は後ろで三つ編みにまとめられており、真っ白に染められていた。

白黒はつきりした容姿の少年は、都会の景色にはあまりにも浮いていた。

どうやら学校に向かう途中のようで肩には学生鞆を下げています。

その鞆には

「伏桜ふくおう高校二年三組 笹波俊樹ささなみとしき」

と刺繍されていた。

「ふあーあ……」

少年は眠たそうに口に手を当てて欠伸をした。

「全く、学校なんてつまんないよなあ……」

そうボソリと面倒くさそうに呟いて、コンクリートで作られた道をゆっくりとした足取りで歩いていく。

どうやらこの少年は、朝起きるのは苦手な方らしい。

日がまだ昇ってないのか（あるいはビルに隠れているのか）、まだ辺りは薄暗かった。

しばらく少年が歩いていると、とあるビルの前でピタッと突然立ち止まった。

「……っと。確か、待ち合わせはこの辺りだったよな……？」

否、少年が立ち止まった場所はビルとビルとの間の路地の入口だった。

入口といってもフェンスの柵が嚴重に張られ、中央にある入口には《立ち入り禁止》の看板が貼ってある。

だが、少年は気にすることもなくフェンスの扉に手をかける。

カシャンと音をたてるフェンス。

扉に鍵はかかっておらず、

キィ、と金属が擦れる不気味な音を響かせ扉はゆっくりと開いた。

路地へ入ると、だいぶ広い場所に出た。

どうやら右左方のビルの裏口のようで、トラックが二台ほど入りそうなスペースがそこにはあった。

しかしその路地には少年しかおらず、ただ殺風景な空間がそこにあるだけだった。

少年は制服のスボンに入っている携帯を取り出すと、パカッ開いて時間を確認した。

四時五十五分。

「あと五分か」

時間を確認するとパタンと携帯を閉じて、鞆へと乱雑に放り投げた。

「俺が一番か。ま、一番遅く来るよりはましだな」

はあと少年はため息をついて、ビルの裏口の扉に続く階段へと腰をおろす。

少年はどうやら誰かと待ち合わせしているようだった。

ふと仰ぐように頭上を見上げると、ビルとビルの隙間から切り取られた空が小さく見えた。

雲一つない青空。

黒く覆われた周りの景色の中、たった一つの”青”。
目が眩んだように少年は目を細めた。

「今日は晴天、か」

四角の青空を見て呟く。

(まるで閉じ込められたみたいだな)と少年は思っ、自嘲気味に笑う。

「そついや、《あの日》もこんな青空だったな

』 お母さん……！お母さん……！』

』逃げて……お母さん逃、げてっ ……！』

頭の中でふと、あの日の記憶が蘇る。

「お母さん」

もう口にすることがなくなったその言葉をポツリと呟く。

「あれから、もう一年か」

そう。あの日、何の伏線もなく、何の予兆もなく……

《あいつ》はいきなり現れたんだ。そして俺はあの日、お母さんを

』 お前、俺が見えるのか？』

』 な……何なんだよ、お前』

』 俺か？俺の名前は《白狐》だ。そして俺は …… お前だ』

俺は。

思いにふけていたその時だった。

キィ、と不意にフェンスの扉が開く音がした。

「　　と。　　どうやら来たみたいだな」

少年は路地の出口へと目をつつす。

そこには30人ほどの男達いた。

しかも、全員ただの一般人ではない。

その中の誰しもが異常なまでの殺気を放っていた。

胸元には「佐津銘会」さつめいかい

という刺繍文字と印章。

どうやらヤクザのようだった。

「《調整者》の、君色キミノイロ　雨蘭ウランだな」

集団の中の一人の男がナイフを取りだしそう呟いた。

「　　ああ。俺は、君色　雨蘭だ」

少年は面倒くさそうに答えた。立ち上がり埃のついた制服をポンポ

んと叩く。

「まあ、今は表の世界での偽名だから笹波俊樹っつーんだけどな。おじさん達には関係ないだろ？」

「俺らの総長を殺したのはお前なのか？」

男達の一人が口を開いた。

質問を聞き、少年はピタリと動きを止める。ゆっくりと前を向き大人達と対峙した。「・・・なんでそういう情報を知っているんだ？表の住人にはわからないようになっていいるはずなんだけど・・・誰かから聞いたのか？」

少年は尋ねる。

「いいから質問に答えろ」

最初に話した男はそう話を遮るように一喝した。どうやら、少年の質問には答えるつもりはないらしい。少年はお手上げとばかりに両手をあげて、やはり面倒くさそうに答え始める。

「・・・はあ。はいはい、殺しましたともさ。佐津銘会の総長、佐津銘薩治さんの部下さん達。」

それを聞くが否や、男達は懐から物騒な物を次々と出していく。先ほどよりも増した殺気を放ちながら、ナイフ、拳銃、ハンマー、太刀・・・様々な武器が出される中、少年は笑っていた。

「多勢に無勢　　っていいてえところだが調整者の中でまたコント
ロール出来ていない俺とはいえ、相手に少数で来るよりは全然頭の
いい考え方だ。」

それじゃあ、始めますか　　」

少年は制服の袖に隠し持っていたナイフを滑らせるように手のひら
に取り出し、クルクルとまるで玩具のように手のひらで回してみせ
る。

「んじゃま

雲を払って、雨に濡れよう。」

そう呟いて、少年はナイフを右手に持ち直し男達に対峙した。

君色　雨蘭。

彼は15才にして《白狐》に憑かれ、人外となった。

白狐の強大な能力をその身体に《束縛》し、未だ未完成のままの調
整者である。

ザシュツ

骨肉が切れる音が路地に響く。

そして、バタンと何かが倒れる音。

それは武器を持った大人達に囲まれた少年が切り裂かれる音ではなく倒れる音でもなく、

ナイフで喉笛を引き裂かれた男が倒れたからだった。

喉笛を引き裂かれ悲鳴をあげることもなく崩れ落ちた男性は、喉から大量の血を吹き出しながら絶命した。

すでに二十数人の男達が地面には倒れており、コンクリートの床は見事に真っ赤に染まっていた。

全員喉笛を引き裂かれたその姿はぞつとさせるような光景でしかない。

残り十人ほどになった男達は後ずさりしながら、少年へと武器を構える。

しかし全員がすでに戦意を失い、ただ目の前にいる少年に 怯えていた。

「く、そつ・・・こんな、はずは」

残りわずかの男達の一人が呟く。

確かにその通りだった。

三十人近くの暴力のエキスパートの者達が たった一人の学生に
こつも圧倒的な差があるなんて。

しかも、少年は切り傷・・・否、かすり傷さえもおっていないので
ある。

青ざめ、冷や汗を流す男達は、ただ目の前の『存在』を異形なモノ
を見たような目で見つめていた。

その目線に気付いた少年は、面倒くさそうに男達に話す。

「ああ。そんな人間じゃねえモノを見る目で俺を見るのは『正解』
だ。因みにおじさん達は弱くわねえよ。全然弱くねえ。ただ、

《調整者》にはほど遠いつてだけだ」

そう呟いたあと、少年は一瞬にして消え、

ザシユッ

また肉が切れる音が空間に響いた。

今度は一気に十人、喉笛を裂かれた。

声帯を破壊され声をあげることもできずにパクパクと金魚のように口を開けて、血を喉から吹き出しながら崩れ落ちた。

しばらくビクビクと痙攣し、そして誰一人動かなくなった。

残りの一人を除いて。

「ひ・・・ヒイツ」

一人残された男は軽く悲鳴をあげ、尻餅をつき後ずさる。

少年は先ほど消えた場所に立っていた。

ピチャツと血溜まりの上を一步一步足を進めて、男の前で少年は止まった。そして、ぐいっと男の襟をひっぱり、喉めがけてナイフを振りかざした。

男が追い詰められたその時、か細い声で口を開いた。

「お、お願いだ・・・ここに殺さないでくれえっ！」

それを聞いた少年は、ピタリと寸前で振り下ろすのを止め、はあとため息をついた。

「俺を殺そうとしといて今度は命乞いかよ・・・。わかんねえもんだな」

下らないとでもいうように吐き捨てた少年に、男は恐怖でガクガクと震えながらしゃべる。

「俺達は、あるやつに聞いたんだ・・・っ！！俺達の総長が、お前にやられたって・・・！」

少年は『聞いた』という単語を聞いて、ピクリと身体を硬直させる。

「それであんたらは、俺を呼び出してこうして殺しに来たのか。・

・死ににいくようなもんなのにな」

まあ、実際にこうなったただけだな。

一人言のように呟く少年。

男はそんな少年の一人言は、恐怖で聞こえてないようだった。

「名前までは知らねえ・・・！けど・・・っ」色々教えてくれてありがとうがとうな」

少年は男の話を守るように口を開いた。

「・・・へ？」

「とりあえず礼を言う。　だが、悪い。情報を教えてくれたいい奴のお前は、生き残してやるのがドラマとかじゃあ普通かもしんねえが・・・生き残すわけにはいかねえんだ。調整者の情報が漏れることもあるんだが・・・調整者を見たものを生き残すと、『理事長』に怒られちまうんでな」

「・・・え？」

ザシュ

と骨と肉を裂く音がして、ナイフが男の喉に深々と突き刺さった。

絶命した男を手から離す。

ベチャッと音がして、血溜まりに新しい死体が沈んだ。

少年には傷ひとつどころか、返り血すらもついていない。

無惨に散らばる死体に見向きもせず、スタスタとその横を通りすぎた。

「白狐、よろしく」

そう呟いた瞬間。

それが合図だったかのように 次の瞬間には死体は《消えて》いた。

何もなかったかのように、血も肉片も何もかも消えていた。

そう。

これは鏡獣、全てにある特徴の能力。

鏡獣の能力を持つ者に殺された者は、《存在》が消滅する。

それは人間の記憶にかかわることではなく、根本からなかったこと

に
する
能力。
生きてきた痕跡が、生まれたことが 全てなかったことになるのだ。

つまりその者の知り合いや友人は、会ったことが《なかった》ことになり。
その者の母親は、そんな子供を産んだことが《なかった》ことになる。

ただし、調整者には記憶は残る。
自然に忘れることはともなくとして、強制的に忘れることはないのである。

他の人間に悟られないからこそ、故に「人口の調整」。

キィ、とフェンスの扉を開けて外の世界へと出る少年。

「・・・はあ。やっぱり殺すつてのは、あんまり気分のいいもんじやねえな。」

物騒な言葉を少年はボソリと呟く。

だが、幸いにも誰も少年の呟きを聞いている者はいなかった。
それは路地へ入っていく時と同じ、道行く人が少なかったからだろう。

目の前にある建物の時計は

五時十五分。

先ほどまでの三十人にまでに及ぶ殺戮は、たった十五分間に起きた出来事であった。

まあ、殺戮があったこと自体が《なかった》ことにはなっているのだが。

「最後の奴に聞いた話……。どうやら、誰かが調整者の俺らのことを表の奴等に情報を流している奴がいるみたいだな。こりゃあ、

理事長に報告だな」

面倒くさそうに呟きながら、少年は初めと変わらない足取りで学校へと向かいはじめた。

あとはもう何もあるまいと、そう気を抜いてしまった。

背後に忍び寄る影に気付かずに。

ガッン

不意に頭の中で何かがぶつかる音が響いた。
そのあと、すぐにくる衝撃と激痛。

「　　っ！！」

すぐに頭を何かで殴打されたのだと、気づく。

後ろを思わず振り向くと　　バンダナで顔を隠した男達が、鉄のパ
イプを持って佇んでいた。

不意打ちされた・・・！！

だが今さら気づいた所でもう遅く、頭を殴打された衝撃でふらっと
身体がふらついた。

「く・・・うつ」

その隙を見逃さなかった集団の一人の男は、少年の鳩尾めがけて膝
蹴りをくらわせた。

「が、あ・・・ッ！！」

ミシリ、と嫌な音が身体に響く。

「う、ぐあ……」

吐きそうになる感覚になり、思わず声を漏らす。膝をつき、咳き込みみづくまる。

肺の空気が上手く入らなくなったような感覚に襲われた。意識が遠退きそうそうになる中、キツと男達を睨み付ける。

「な、んだてめえ、らは……！」

バンドナを巻いた男達は無言で少年を見るだけだった。

そしてもう一度、一人の男がパイプを振りかぶり少年の頭へと思いつき振り下ろした。

もう一度頭に衝撃が走り、少年は完全に倒れ伏せた。

ああ。クソツ……《また》か。

少年は意識が薄れゆく中、そんな事を呟く。

最後に視界の隅に見たのは

白く揺れる自分の三つ編みだった。

『なあ』

真っ暗な闇の中で声が聞こえる。

『なあって言ってるんだろ』

うるさいな。黙ってるよ。

俺は声に反論した。

『んなこというなよ。冷てえやつだな。』

ちえっ、と舌打ちする声が聞こえた。視界は真っ暗で、声の主がどこにいるかはわからない。

『ったくよお・・・そろそろ”解放”してくんねえかな。暇なんだよ。いつもお前には能力は”ちよっとだけ”貸してやってるが、お前も本気で殺りたいだろ？』

ふざけるな。

本当はお前が人を殺したいだけだろう。お前なんかと一緒にされちゃ、困るんだよ。

声の主はそれを聞くが否や、ちえっとまた舌打ちした。

『ふん。相変わらず正直じゃないやつ』

『そういや、』
声の主は思い出したかのように、呟く。

『あのクソ理事長の能力なんだろう？ ああ、俺を縛っている”鎖

”』

”鎖”

声ははっきりとそう言った。

俺が黙つたのを察してか、クククと笑う声が聞こえた。

『……まあ正直、そんなことは”どうだって”いいんだよ
声の主はクツクツと笑いながら、俺にいう。

『俺は、”お前の身体”さえ奪えりゃあそれでいいんだ』

声が一層、大きくなった気がした。

『つまり ”だから”俺はお前に能力を使わせてんだ』

あたりは相変わらず闇でおおわれていて表情は見えないが、ニイと
声の主が笑ったような気がした。

『ああ。勘違いするなよ？俺の能力を使えるから、鎖があるからって・・・安心していいわけじゃないんだぜ？今は慣れるための”お試し期間”ってやつだ。俺はお前の身体を奪うために、”能力”を貸してるんだからな』

まるで、ゲームをしているかのような言い方だな。そう言っただけだ。

『おいおい何いってんだ？これは”ゲーム”だろ？俺がお前で、この身体を取り合いだ。楽しくやろうぜ』
そういって、またクククと笑った。

あの日。

俺の中にズカズカと入ってきた拳げ匂に、今度は身体を奪うってか。大層身勝手な話だな。俺は呟いた。

『なんだ？まだあの日ことを根に持ってるのか？』
声の主は呆れたような口振りで俺へ呟く。

『”ああ”なったのは俺のせいじゃねーさ。”俺は何もしちゃいねえ”。俺はあの日。お前の身体に”入り”はしたが、を”乗っ取っちゃ”いねーんだよ』

嘘つきめ。

俺は自分の声が震えているのがわかった。

『嘘じゃねえさ。だから』

だから 先は少しだけ間をあけて、まるで剣を振り上げて下ろすように俺に深々と突き刺さった。

『だから、自分の母親を殺したのは”お前”だ』

声の主は、トドメとも言わんばかりにその事実を告げた。

俺は黙る。

黙るしかなかった。

それは、”俺自身が一番気づいていたこと”だったから。

黙った俺を見越して、声は一人言のように呟く。

『まあ・・・お前が俺に”頼る”ようになる日も、あまりそう遠くねえ気がするんだよ。「人口の調整」だけじゃ済みそうにない
これからの先の”未来”ではな』

声がいきなり後ろから聞こえた気がして振り向いた。
おそらく、振り向いた。

前後がどちらかもわからないその闇の先に
一瞬、白い狐の姿が見えた気がした。

「う………つ、」

痛みで目を覚ますと、そこは見知らぬ部屋だった。

電気は着いておらず、気絶していた間に夜になったようで月明かりだけがガラスの割れた窓から薄く周りを照らしていた。

目が暗闇から慣れてくると、とても部屋とは形容しにくいことがわかってきた。

埃を被っている床と散乱するガラス。部屋の中は荒れ放題だった。

どうやら、今は使われていない倉庫のようだ。

次に自分の体を見ると、腕を縄で縛られ、工事用のフックで吊らされていた。吊らされていたといっても、足と地面との距離は十センチ程度でただ、足を使えなくしてあるだけである。

そして着ている制服はボロボロだった。むしろ、自分がボロボロだった。

殴られた頭部から、蹴りをくらった腹のみといわず、全身にかけてズキズキと体が痛む。

どうやら気絶させられたあと、さらに殴られたりしたらしい。

見える限りで痛むところは青アザになっている。

どうやらここに連れてこられてから、数時間は経過しているようだ

った。

肩から流れる三つ編みは暴力のせいで乱れていて、所々埃で黒くすんでいた。

そんな自分を確認して、少年はようやく口を開いた。

「ああ、ひさびさだな。・・・こうやって拐さらわれんのも。”何日ぶり”だっけな?”

ははっと自嘲気味に笑う。だが、顔は全然笑っていないかった。

「・・・たく、俺が調整者の中で”普通の人間に一番近いから”って毎度毎度拉致され過ぎなんだよ・・・!畜生。」

少年は悪態つくように呟く。

「どうやら、少年はすでに何度か”こういう事態”に巻き込まれたことがあるらしい。」

「にしても、なんなんだ?調整者をさらうなんて、こんな意味のねえことをしゃがるのは。」

広い空間に少年の声だけが響き渡る。

そう。

別に調整者には賞金やらを課せられていたりなんてしない。

調整者の存在を知ったところで、調整者を捕まえたところで

”どうにかなる”わけでもないのだ。

・・・いや、後ろで”何か”が絡んでいるとしたら別だが

「おはよう、調整者君?」

そこまで考えていた辺りで、ふと倉庫の奥の方から声がした。

「はっ！手荒い歓迎だな。なんだ、あんた。朝、俺を後ろから殴りつけたやつか？」

少年はキツと男を睨みつけた。

男はそんな視線をもともせず、ふつと笑った。

「そうさ。それで、君を拉致らせてもらったんだよ。・・・まあ、殴ったのは俺じゃないがね。」

わらわらと、スーツを着た男たちが倉庫の入口から姿を現した。

「調整者をさらえ、つてな。」ある人物”から依頼が来たんだよ」

「そんな怨んだような顔をするなよ。鏡獣を制御できてないお前のことを俺らに教えたのは別の奴さ。呪うならそいつを呪ってくれ」

そういつて、両手を軽く広げて首を振った。

どこのどいつかわからねえやつを怨めるような、俺はそんな器用な奴じゃねえんだよ。

そう思った。

「ああ、そうそう。俺たちには関係ないらしいんだがな、ある情報もついでに引き出させて言われてんだよな」

男はそう呟いて、後ろで待機する男たちに『囲むように』と合図をする。

「・・・拷問でもする気なのか？」

察したように男に尋ねた。

クッククックと頭を押さえて男は笑う。

「大正解。情報をききだすのは、やっぱりそっちの方が手早くなあ。まあ、とはいっても”表側”の人間だから、君たちの世界じゃ物足りないかもしれなげね。まあ、道具やらは使わないさ」

また表側、か。

雨蘭は拷問という言葉には関心を示さず、ただ今までさらってきた奴らのことを思い出す。

前も、その前もずっとさらわれたときは表側の人間ばかり。つまり、これではつきりした。

”裏側”誰かが後ろで手を引いているということだ。

「さて、最初に『他の調整者の情報と居場所』を吐いてもらおうか」
今から拷問されるといふのに、落ち着いている。
しかもこの質問。
前に俺をさらってきた奴らと”同じ質問”だ。

ああ、そうだ。と男は思い出し方のように呟いた。

「とりあえず、余地を与えようじゃないか。君もまだ子供なわけだし、今情報を話すなら拷問はしないでやろう」

「はっ！あんたらに教えることは何にもねーよ。ばーか」

くだらないとばかりに、雨蘭は男たちに言い放った。

その瞬間、少年の顔めがけて男が殴りかかった。よけることができない少年は思いつきりその拳を顔で受ける。

ギシッと縄がしなった。

ズキズキと頬が痛む。
いてえ。

素直にそう思った。

「こうやって縄でしばっちまえば、普通の人間同然だったのは”本当”みたいだな」

無抵抗な俺をみて、そう呟いた。

そんなことをいう男に俺は笑った。その通りだ。

俺は”他の調整者と違って”そんな人間離れしたことはできねえ。だけど、

「は？お前の拳なんか屁でもねーよ。やっぱり表の奴らは表の奴らだな。こんなんじゃない能力を使うまでもねえのさ」

そう笑いながら、ペツと血の混じる唾を男の靴に吐きかけた。

すると、男は今までにないほど逆上した。

「何しやがるんだ、このガキ・・・ッ！！」

今度は腹めがけて膝蹴りを腹にくらわせられる。

肺の中の空気が一気に空っぽになっていくのが、自分でもわかった。げほっと思わず咳をする。

男は冷めた目でこちらを見ていた。

「わかったよ。もう手加減はしねえさ。まあ、これからお前が吐くまでじっくりとなぶるつもりだから覚悟しろよ」

「は！やれるもんならやってみやがれっ！！」

男はまわりの男たちに「やれ」と命令した。

自分はただ無抵抗に今から殴られるというのに、酷く落ち着いている。

むしろ始めるなら早く始めろと言っているようなものだった。

別に何か策があるわけじゃない。

むしろ、どうでもよかった。

もしかしたら。

俺は死ぬことなんて、今更どうだっていいと思っていたりするのかもしれない。

人生が変わってこの世界と運命に、うんざりしているのかもしれない。

本当に、くだらないと。

殴られて続けてから何時間経過したのかはわからない。

今までずっと殴られ続けて、もう痛みの感覚すらなかった。

意識は朦朧きゆうきゆうとしていて、この殴なぐられている間に気絶させられたり起こされたりを繰り返されたかはわからない。

ただわかるのは、俺は気絶して寝言とかで情報はしゃべってはいないということだ。

いきなりぐいと髪の毛を引っ張られた。顔を上に向けさせられる。

「本当にしぶといやつだな。そろそろこれ以上続けると死んじまうぜ」

男は俺の顔を見て呟く。

俺はただ朦朧とした意識でぼんやりと男を見ていた。

「まあその時は、そいつは情報を持っていなかったと報告すればいいだけの話さ」

男は薄く笑いながら、雨蘭の髪を乱暴に離した。

その時、髪を三つ編みに結っていた”ゴム”がするりとけ、少年の三つ編みがばさりと解けた。

それを虚ろな目で確認した雨蘭は、

うつすらと笑みをこぼした。

「あー・・・すまねえ、”リミッター”が外れちゃった」

「あ？」

男は何か言ったか？とでもいうように呟いた。

ああ、やっぱりか。

運命は俺だけが持っているんじゃないかな。”あいつ”は 運命を変える奴だった。

「”あいつ”はこういふ諦めたときにこそ、出てきちゃう奴なんだよなあ。」
ボソツと独り言のように呟く。

「何訳のわからねえこといってん、だよッ！」

男はまた痺れをきらしたように顔面を殴りつけた。
俺はまた容赦なく顔面にその拳を受ける。

男は手を休めることなく追撃の拳を振り上げた。

「吐くまで拷問だっついてんでんだろう、が！　ぐえっ！」

男は再び追撃で少年を殴ろうとしたが、空振りをし勢い余って地面

に突撃していった。

無論、少年は縛られてよけられるはずもない。

今までの笑い方とは違う、ウズウズとしたまるで楽しいことでもするのかわような目。

”獣”のような鋭い目でこちらを見ていた。

ゾツ、と

背筋が凍った瞬間。

男達の視界から少年が消えた。

何も見えなくなった。

「・・・・・・・・・・」

二度目の目覚め。

気が付くと、朝になっていた。

だが相変わらず倉庫の中は薄暗いままで、朝日が薄く入ってきているだけだった。

「・・・・・・・・・・やっちまった」

少年は呟いた。

「ったく、またいつの間にかやってくれちまってよ……」

記憶がねえなんて毎度毎度、気持ちが変わりい。

”あいつ”が出ると、いつもこんなだ。

「……わりーなお兄さん達。あんたらは、ただ運が悪かっただけなんだよ。」

返事は何もなかった。

少年は気にすることもなく、地面に落ちていたゴムを見つけると軽く自分の髪を結った。

そして何事もなかったように出口のドアへと歩き始めた。

「んじゃあな」

倉庫に別れを告げる。

中からは何の返事もなかった。

「あーあ、制服がボロボロ……まあ理事長が新調してくれるか。にしても、まじで体が痛え！本気で殴りやがって……肋骨は確実に折れてんな。こんな怪我してんのにちゃんと家に帰れんのかよ。・

「・・・まずはここがどこなのかの確認だな」
「はあ、とため息をつく。」
「面倒くさそうに一歩一歩足を引きずりながら足を進める。」

とある山の中にある古びた倉庫。

そこの中には、『手も足も綺麗に分裂され、誰かのなのかもわからないような死体』が山積みになされていた。
数分後、ここであったことはなかったことになるのだろう。

少年は”家”と呼ぶ場所へ帰る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7171p/>

人外-ジンガイ-

2011年10月8日13時55分発行